

第35回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会 「大学の外国語教育の今後の方向性」

甲南大学国際言語文化センター主催による第35回言語教授法・カリキュラム開発研究会が「大学の外国語教育の今後の方向性」というテーマで、以下の通り開催され、78人の参加者があった。

開催日時	2013年7月20日（土）13：30～16：30
受付開始	13：00
懇親会	16：40～17：40
場 所	研究会 甲南大学8号館1階811講義室 懇親会 生協2階レストラン
13：30	開会の辞 国際言語文化センター所長 中村典子
13：35～13：40	基調講演者紹介 国際言語文化センター教授 伊庭緑（司会）
13：40～15：00	基調講演「日本の大学英語教育はどこに向かうのか」 講師 東京大学大学院教育学研究科教授 斎藤兆史氏
15：00～15：10	休憩
15：10～16：25	質疑応答 (1) 本学の外国語教育に関する報告を含む質問（50分） (2) 基調講演に関する質問（25分） 質問票の回収 国際言語文化センター准教授 柳原初樹 国際言語文化センター准教授 谷守正寛
16：25～16：30	まとめ・閉会の挨拶 国際言語文化センター准教授 柳原初樹
16：40～17：40	懇親会 （司会）国際言語文化センター准教授 谷守正寛

基調講演「日本の大学英語教育はどこに向かうのか」

東京大学大学院教育学研究科教授 斎藤兆史

講師紹介

今回ご講演いただく斎藤兆史先生は英文学者でもいらっしゃるが、日本の英語受容・学習・教育史関連資料の検証や高度な英語力を身に付けた日本人に関するケース・スタディを通じて日本人に相応しい英語学習・教育の在り方を研究されている。また最近では、英語教師がクラスの特성에応じて臨機応変に教授法を工夫すること、また授業において学習者に英語使用の手本を示すことが重要であるとの認識に基づき、教師教育の方法論にも力を入れておられる。

文部科学省が平成15年3月に発表した『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画』は賛否両論があるが、英語教育論は今や日本の社会現象のひとつになっている感がある。今回は、英語教育に関してたくさんのご著書もあり、社会に向けてさまざまな提言をされている斎藤先生をお迎えし、日本の大学英語教育の今後を考える機会にしたいと思う。

同時に、言語文化センターの英語以外の言語教育担当教員からも、基調講演の内容と自分の担当する言語教育との関連性や相違点に関して簡単なコメントを述べてもらい、斎藤先生からは東京大学の英語以外の外国語教育の現状や方向性についても紹介してもらいたくも思う。

講演の概要

現在の大学英語教育プログラムについて以下の通り資料が示された。(資料提供：山形大学人文学部准教授・小泉有紀子)

大学名 (プログラム名)	特 色
山形大学 (コミュニケーション・スキル1)	習熟度別クラス, 全学 TOEIC, ALC の e-learning
東京大学 (教養英語 ALESS/ALESA)	総合的英語力育成, 新教科書『教養英語読本』, 英語による発表力育成
国際基督教大学 (リベラルアーツ英語プログラム (ELA))	
成蹊大学	多読教育プログラム
名古屋大学	独自の e-learning を授業の一環で用いる。入学時に TOEFL-ITP 受験
筑波大学	習熟度別クラス編成 (入学時プレイスメントテスト)
岡山大学	習熟度別クラス編成 (入学時 TOEIC-IP)

茨城大学 (総合英語プログラム (IEP))	習熟度別クラス編成, 週2回同一教員と最低週1回CALL自習, 学術英語 (EAP) あり
広島大学	全学 TOEIC 1 年次 2 回, 2 年次以降 1 回
宮崎大学	文科省 GP, ALC e-learning
熊本大学 (英語 I)	ALC を用いた e-learning, オリジナル CALL 教材 (一部)
九州産業大学 (英語教育プログラム)	文科省 GP, 学部横断型少人数能力別, ALC
千葉大学 (普通教育英語科目)	文科省 GP (Online CALL システム)
神戸大学 (外国語第 I (英語))	1 年オーラル・リーディング 1 コマずつ受講。アドバンストコースの各種授業 (資格試験対策含む)
上智大学 (共通教育英語)	
明治大学	「英会話」「資格英語」クラスを開講
三重大学	入学時の TOEIC-IP テストに基づいて習熟度 (外国語教育科目 (既習外国語英語)) 別, 英語基礎, プレ TOEIC, コミュニケーションの 3 クラス
北海道大学	英語 I・II 必修, そのうち 1 単位をオンライン授業として開講

大企業 (上場企業) では学生を採用する時に英語力を参考にするのが 16.2%, 参考にすることがあるというのが 51.8%, 配置換えや配属の時に参考にするというのは 28.4%, 参考にすることがあるというのが 49.3% といった要請があるなか, 大学も少子化の時代の中で生き残りをかけるために, 学生の英語力を付けさせることが求められてきている。それは, 大学が TOEIC/TOEFL の点数を上げたいと考えるようになったという結果をもたらしている。これは, 結果を数値で示すことが求められたことによると言える。

政府からは継続的戦略に資するグローバル人材の育成, 大学において従来の入試を見直す実用的な英語力養成をはかるといった要請が出てきている。派遣・受入れの留学生を増やすことも唱えられているが, インターネット時代にはたしてわざわざ外国に行く必要があらうかとも思われる。また, 大学での英語による授業の実施・増加も求められている。なぜわざわざ英語で授業をしなければならないのかというのは, 推進したい側の考えでは, 留学生が日本語を習得してから日本の大学で授業を受けていては時間がかかるが, 日本に来て英語で授業を受けられればすぐに学ぶことができ, 日本の大学がそれだけ開放しているということも示したいという思惑があるようだ。しかし, まだ見ぬ留学生のために英語で授業を行うことよりも, 目の前にいる日本人の学生にきちんと日本語で授業を行う方が, はるかに教育効率がいいと思われる。本当に何でもかんでも英語にすれば良いのだろうかということで, 大学の英語教育の原点に立ち返ることが必要である。

日本の英語教育の根本問題は何か。それは日本語と英語が構造的にかけ離れている、日本人にとって英語は習得しにくいということである。例えば、「アメリカの国務省は、外交官や政府の役人が職務上学ぶ必要のある外国語を、習得の難易の点で区別していますが、日本語はアラビア語と並んで、アメリカ人が習熟することの最も困難な言語とされ、(中略)日本語がアメリカ人に難しいことのまさに裏返しとして、英語は日本人にとって、本当はひどく難しい外国語なのです。」(鈴木孝夫『日本人はなぜ英語ができないか』岩波書店, 1999年)とある。また、日本人は日本国内では日本語だけで不自由なく生活できる。だから、日本語母語話者が英語を習得するのはいっそう難しいと言える。

「日本の外国語教育は、世界から知識を吸収するためでした。両親は英語教師でしたし、中学から東大まで八年間一生懸命英語を習ったのに、私は一言も英語をしゃべりませんでした。香港から来て経済学部の私の(勿論日本語の)ゼミに黙々と長年(忍耐がいったと思います)参加してくれた関志雄氏の言うように、『日本人が英語を話せないのは英語の先生が英語を話せないから』なのです。」(浜田宏一「大学の国際化はなぜ必要か?」『學士會會報』July No.895, 2012-IV)とあるように、英語については、他教科と違って、習得が伸びないのは教え方が悪いと批判されてきたきらいがある。しかし、はたして、例えば音楽ができないからといって、音楽教師が悪いといったことは言われまいだろう。従来の教え方においても、文法をきちんとやって伸びるものは伸ばしておいて、それから実用面では自分で伸ばせるような流れで教えておく方が、はるかに効率が良いのである。例えば、今は発音記号を教えないが、きちんと教えることで効果がのぞめると言える。

夏目漱石が興味深いことを述べている。英語の力の衰へた一原因は、日本の教育が正当な順序で発達した結果で、一方から云ふと当然の事である。何故かと云ふに吾々の学問をした時代は、総ての普通学は皆英語で遣らせられ、(中略)吾々より少し以前の人に成ると、答案まで英語で書いたものが多い。(中略)処が「日本」と云ふ頭を持つて、独立した国家といふ点から考えると、かゝる教育は一種の屈辱で、恰度、英国の属国印度と云つたやうな感じが起る。(中略)日本に学者さへあれば、必ずしも外国製の書物を用ゐないでも、日本人の頭と日本の言語で教へられぬと云ふ筈はない。(夏目漱石「語学養成法」1911[明治44]年)

TOEIC/TOEFLの義務化を進めると、アメリカに収める膨大な受検料が必要とされるが、むしろ、日本の英語教育では各大学が独自に検定試験等を作るということが大事である。TOEFLで学生の英語力を測り、TOEFL対策講座を開設することがある。これは、高等教育機関としての教養教育を放棄することにもなる。大学として学生に求める英語力を設定し、それを育成するための英語教育プログラムを独自に作ることは、手間はかかるが、大学独自の教育ができるのである。そこで、講演者は独自に英語教材を開発した。東京大学にも独自のものがある。講師がこれまで手がけた英語プログラムと教材作成としては、東京大学教養学部英語I、東京大学教養学部英語II、放送大学「英語IV('03) — Cultural Crossroads」、放送大学「英語の基本('08)」、研究社『English through

Literature—文学で学ぶ英語リーディング』(2009), NHK「3か月トピック英会話」(2009/2010, 2010/2012), 松柏社『My Home, My English Roots—日本の英語教師15人のルーツ』(2013), 独自に作成した教科書(On Campus, Campus Wide [東京大学出版会, 2006]と視聴覚教材を用いた統一授業・Session 1: Saito Yoshifumi, 'You: Introduction'; Norma Field, 'Only You' (On Campus, 2006) . [読み教材]・Interview with Norma Field [視聴覚教材] などがある。こうした大学独自の英語プログラムと教材作成を手がけるということが大事なのである。なお、原稿料もかからず、教材料も高くつかないことや、ビデオ機器を活用した視聴覚教材作成も最近では経費を安くできるため、学生にとって高くつくものではないというメリットがある。講演者は高校時代にはラッセルの随筆を多読したが、良質の教材を厳選して学生に与えて多読させることも勧める。なお、ラッセルの肉声はYou tubeでも観ることができる。

英語が世界で使われるようになったことに関して、次の引用が紹介された。

—将来もイギリスが、言語のうえに成り立つ経済的優位性を維持するとは考えられない。もしイギリスが英語にかかわる優位を保ち続けるとすれば、その多くは、イギリスの幅広い文化的結びつきとその世界的な『ブランド・イメージ』によるものであろう。(デイヴィッド・グラッドル著・山岸勝榮訳『英語の未来』)

主な質問より

(1) 外国人に対する日本語教育では日本語だけで日本語を教えるが、筆者が英語のみでラッセルを読んで英語力を習得したことは魅力的である。英語のみで英語を教えることについてどう思うか。

—多くの英語教育の最初のモデルとなっているものは、ネイティブの教員がいろいろな国からやってくる留学生に対して英語で教えるというものだが、いろいろな言語の学生がいるために、英語しか使いようがないのであって、日本におけるように、圧倒的に日本語の母語話者の学生で教員も日本語母語話者である場合には、それなりのやりようがあるはずである。日本語を使って訳して教えた場合の方が分かりやすい場合もある。全部 First language を使って教えた方が良いとは思わない。日本語教育にしても、非母語話者の日本語教師が日本語を教える場合、英語を使って日本語を教えるのが良い場合もあり、非母語話者の教師には非母語話者なりの教え方があろう。日本語母語話者として留学生を相手に段階的に日本語を使って教えるというのは有効だとは言えるが、それがすべてではない。

(2) 高校の授業に関する質問として、品詞を教えること、発音記号を教えることについてどう考えるか。

—まず、多忙な教師の業務の中、良い教育を施すには先生方の待遇も良くすることが必要だろう。その上で、そうした基礎をきちんと教えることは大事である。最近では人前で英語を話すことに抵抗はなくなったように見えるが、文法は乱れているし、読解はできない。

基本となるのは読解力である。もう少ししっかりしてくれないと困る。具体的には、当たり前前のことであるが、流行に流されずにきちんと辞書を引くこと、単語帳を作ること、単語を書いて発音記号を書いて複数の意味をいくつか書いて、できれば例文も書くこと。どうやったら単語は覚えられますかとよく聞かれるが、どうやったらではなく、覚えられるまで勉強するという発想で勉強することが大事である。中途半端な英語力でグループ・ディスカッションをやる研究授業をよく見かけるが、生徒の英語力を教師が良く把握して行うのであれば良いが、そうでなければただ時間を無駄にしまうものである。小学生には中途半端な英語教育を行うよりも、きちんとした日本語を教えるから英語を教えるべきであろう。母語をマスターしていない学習者に外国語を教えるても学力は伸びないという報告がたくさんある。

(3) 中学程度の英語力しかなく英語に興味もない学生にはどうすれば良いか。

－これは難しい。映画などを使ってなんとか興味を持たせる部分を探ったり、文法を理解させてなるほどと思う者であればきちんと文法を教えたり、さまざまな方法で取り組むしかないだろう。

※割愛するが、そのほかにも数多くの質問とそれにまつわるエピソードが紹介された。

国際言語文化センター教員からの質問

(1) 英語学習の成功者になるためのポイントと動機付けは何か。(英語教員)

－基礎をしっかりとっておけば伸びが早い。しかし、日本では先生も中途半端でしっかり英語が使えないところでやりとりをして、そこで会話が伸びることはない。文法や語彙などをしっかりとっておけば、外国に行った時に伸びるだろうし、その方がはるかに効率も良いだろう。時間の少ない授業のなかで何が重要であるかをよく考え、いろいろな手法を適切に使って効率よく教えるべきだろう。

(2) 世界に通用する紳士・淑女という観点に立って、語学力を社会で使っていこうという積極性・自主性を養っていく工夫があれば伺いたい。(ドイツ語教員)

－必ずしも英語だけの問題ではない。初修外国語を国際レベルにまで上げるのはなかなか難しいかもしれない。積極性については、まず日本語できちんと発想ができて内容をまとめられる力を付けさせることが必要である。積極性といった学生の性格まで変えるのは困難なので、日本語でまずそうしたことを教えるので良いのではないか。

(3) 文科省からの要請に対してはどう対応できるか。(フランス語教員)

－とにかく地道に訴えていかなければならない。上からの指示に必ずしも従うわけではないし、科研費など予算をもらうことは期待していないので言うべきことは言える。

(4) 先生は将棋が趣味だが、私は生き方・趣味を学生に伝えたいと思ってなかなかうまくできない。学生にとって良き先生であることについて何かヒントを。(中国語教員)

－日本は一筋にこだわる職人の文化がある。しかし、教養としていろいろなバランスを備えた人間があってよいのではないか。パソコンが将棋名人に勝ったのはショックだ。名人

の存在意義がなくなりかねないが、学習ソフトを使うのはよいものの、語学教員には将棋名人のようなことは起こらないだろう。答えをうまく見出すにはいろいろなことを知っていて、いろいろな趣味を持っていることが、教養教育にも役に立つだろう。

(5) 東京大学では技能別に分けての指導はどのようにしているか、教養だけでなく専門まで教えるのか、第2外国語教育はどうなっているのか。(韓国語教員)

－習熟度別はない。初習か既習かという区別だけがある。英語では入試の段階で高いハードルを経てきているので習熟度別は意味はない。それぞれの学部に上がってそれぞれの授業を取るということになっている。

※技能別と習熟度別というのを取り違えてお答えになったと思われる。

(6) 多読が良いと言うが、受験勉強時代にどのぐらい冊数を読んだか。また、精読についてはどうか。(日本語教員)

－受験勉強時代はそれほど読んだわけではない。十冊程度。また、多読と精読は相反するものではないので、精読は絶対に必要である。

(文責：谷守正寛)